

新年のご挨拶



二松学舎大学 父母会報

平成5年5月10日創刊
令和4年1月20日発行
(第115号)

二松学舎大学父母会
(本部・事務局)

東京都千代田区三番町6番地16
二松学舎大学学生支援課

題字は
故 観山貞広常吉先生書



父母会長
細谷 文雄



新年明けましておめでとうござい
ます。年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げると共に、会員皆さま方のご健康とご多幸をお祈りいたします。昨年も新型コロナウイルスが猛威を振るいましたが、被害を受けられた方々に心からお見舞いを申し上げます。昨年からワクチン接種が始まり感染者の激減など明るい話題も出てまいりましたが、新たなオミクロン株が昨年末から流行しております。今なおウイルスの脅威は衰え知らずですが、私たち一人ひとりが感染しない、させない行動をしっかりと守っていきましよう。さて、これまでの父母会活動ですがさまざまな活動が制限される中で、今年度は五月の定期総会を対面とズームによるハイブリッドにて開催しました。また本来、各地区に学長はじめ教職員の皆さまをお招きし、大学の現状や教育方針、学生生活や就職活動等の意見交換の場となる七月の地区別父母

懇談会も、今年度はオンラインで開催できたことに感謝申し上げます。その後の活動については、十一月の創緑祭はオンライン開催のため、例年参加させていたいております父母会無料喫茶室も、今年度は中止としました。また父母会主催の卒業パーティーも中止とし、今年度も卒業生には記念品の贈呈という方向で進めております。計画通りの活動が出来ませんが、再開に向けてより良い活動が出来るよう準備をしているところです。学生たちも新しい生活様式のなかでの日常生活やオンラインによる授業等々、慣れない生活を強いられている事と思います。今年も、感染防止対策を優先しながら迎える新年となりますが、相手への思いやりや人とのつながりの大切さを忘れないで下さい。今年の干支は寅年です。決断力と才知の象徴としての意味もあり、縁起物として親しまれているそうです。たとえ逆境にあっても立ち向かう強さ、持ち前のチャレンジ精神で邁進して下さい。大学側の学生に対する感染拡大予防対策を含め、さまざまな支援に感謝申し上げます。

正直なところ、おめでとうと言えるような気分ではない方も多いかと思いますが、一日も早い感染症の収束を願います。明るい一年となりますようお祈り申し上げます。

結びとなりますが、私たち役員一同、大学と学生のパイプ役と活動してまいりますので、引き続き会員の皆さま方には深いご理解ご協力をお願い申し上げます。

二松学舎は、明治十(一八七七)年十月、漢学者であり法律家であった三島中洲先生が、東京・九段の地に漢学塾二松学舎として創立され、本年一四五周年を迎えます。爾来、建学の精神「東洋の精神による人格の陶冶」「己ヲ修メ人ヲ治メ一世ニ有用ナル人物ヲ養成ス」の下、道徳心、倫理観の醸成を基本理念に、誠実で豊かな人間力を身につけた、真の国際人の育成を使命とした教育を行ってまいりました。

今年で五年目に入った長期ビジョン「N'2030 Plan」では、建学の精神に基づいた育成する人材像を、AIに代表されるニューテクノロジーやSDGsによる社会・経済構造の大変革、価値観の多様性などを展望し、「日本に根ざした道徳心を基に、良質の知識と英語・中国語等語学力を身に付け、我が国の歴史と文化を理解し、かかる知識を背景として、よりよき社会を実現する目標を持って、グローバルに活動する逞しい人材」とし、この人材育成実現のため、「二〇三〇年教育体制」の構築に向けたさまざまな改革を進めております。

大学では、二〇一七年度に都市文化デザイン学科、二〇一八年度に国際経営学科を開設し、国際経営学科完成年度である二〇二一年度の収容定員は、二七二〇名となりました。二〇二二年四月には、文学部に中学校・社会、高等学校・地理歴史の教員資格が取得できる教職課程を備えた「歴史文化学科」

(定員六〇名)を開設。四学科体制となります。また、大学院では国際日本学研究所(定員二〇名)を新設します。さらに数理データサイエンスを含む必修科目を両学部で初年次教育に織り込んだ新カリキュラムも始まり、これにより、「N'2030 Plan」での育成する人材実現のための教育体制が整います。施設面では、二〇一七年に取得した「九段5号館」の整備も進み、四月からは、アキバラボの設備を移設。都市文化デザイン学科に限らず、多目的な施設と

の拡充・強化、「産業界・地域社会等との連携強化」、「より学修者の立場に立った教育の展開など」、教学マネジメント全般を見直し「教育の質の保証」を再確認して、「良い教育をする大学」としてのブランド化を図っていく方針です。

法人部門では、二〇二一年度、適切なガバナンスの構築・強化策として「ガバナンス・コード」の策定・公表を行いました。また、資産運用では初期の目標を達成、奨学金ファンドや寄付金



年頭所感

創立一四五周年を迎える 二松学舎のN'2030 Planの課題

理事長 水戸英則

しての活用を始めます。

また、ICT教育環境のさらなる拡充のため、二〇二一年度一年次生から実施している学生一人一台PC体制を

始め、より良いWiFi環境の整備などICT教育を支えるインフラの整備を行い、さらに今後、教学マネジメントへのデジタル技術を積極的に導入した、より質の高い成績管理や教育手法の開発など、大学におけるDX(デジタル・トランスフォーメーション)を推進。さらに「学生支援」、「就職支援

募集体制の強化を図りました。また、文部科学省の私立大学等改革総合支援事業では、タイプ3「地域社会への貢献」で採択されております。

二〇二二年度は、適切なガバナンスの透明性・公明性を更に強化するため「ガバナンス・コード」の充実、情報公開の拡充等、改革を引き続き進め、組織の在り方や人事制度についても整合性を追求していきます。また、重要な使命である財務の安定的な管理・運営に留意し、将来の教育環境整備や奨学

金基金の一部として活用するための恒常的な寄付金募集体制を強化。引き続き、改革総合支援事業の補助金の獲得も目指します。資金運用については、規程に基づきリスク管理を徹底し慎重に行っていく他、外部第三者評価による法人財務格付の実施などにより、速やかな改善を行い、長期ビジョンの最終目的である本学のブランド力向上と志願者・入学者の増加・安定に結び付けていきたいと考えております。

なお、本年十月十日に創立一四五周年を迎えるにあたり、現在いくつかの記念事業実施を計画しており、本学の社会的プレゼンスを高めて参りたいと思います。このため「創立一四五周年記念募金(二松学舎教育研究振興資金)」の募集もご案内させて頂く予定でございます。ご協力頂ければ幸いです。

今後、内外環境の激変など、さまざまな事象に対応できる知恵を古典から学び、将来の発展につなげていくなど、建学の精神にのっとった人材を育成していくことが、私共二松学舎に与えられた使命であると確信しております。この方針の下、次の一五〇周年に向かつて進んでまいります。

父母会の皆様におかれましても、引き続きご支援・ご協力をお願いして、新年のご挨拶といたします。



父母会そして学生の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。振り返ると、すっかり様子が変わったってしまった日常に、いつの間にかなんの感慨も持たなくなってしまう自分にも驚くことがあります。感染拡大による社会機能の様々な制限は、これまでの私たちの日常というものを問い直す機会でもありました。

早いもので、こうした新型コロナウイルス感染症対応に追われながらも、本学の教育研究活動も二年目となります。学生生活も含めて教育活動でのさまざまな場面では、対面による相互性が十分とは言えないものを本学も余儀なくされました。SNSが発達しているとしても、様々な行動を規制される環境のなかで、若い学生たちのコミュニケーション能力にどのような影響が生じるのかとても心配です。言葉は、単なる言語の記号ではありません。それを口にする場面での、身体の動きを含めた表現や背景としての文化的な文脈への認識等を含む思考力そのものだからです。もちろん私も二松学舎大学は、可能な限りの対面授業の実施と、それを補うオンライン上のさまざまな工夫、そして社会的な環境が許すなかでの授業及び施設の開放を行ってきました。つまり、誰一人取り残さない教育ということを念頭に置きながら、さまざまな工夫を重ね

ねてきたつもりです。もちろん、学生の皆様にはこの在籍期間だけでなく、ぜひ卒業後も本学を大いに活用していただきたいと思えます。特にこれから卒業生となる皆さんには、共に学び研鑽する場として、私どもはその機会を提供し続けたいと思えます。それは、コロナで大学が変わったということではなく、大学とは本来学びたいものの集まりだからです。この原点を失わない限り、オンラインを含めた学びの可能性はさら

ちに提供しています。こうした私学の教育機関としての使命を、二松学舎大学は真摯に受けとめることで、学生たちの内に生き抜く力を育てること、学生を有為の人材として社会に送り出し続けることを、これまでと変わらぬ私どもの教育方針としています。そして、こうした社会的な困難が避けられない今だからこそ、教育機関としての自らの学びの場を大切にし、その維持と質の向上に努めなければならないと思えます。



年頭所感 あけましておめでとうございます

学長 江藤 茂博

に広がり続けるものと確信しています。

さて、現時点では、世界各国の感染状況もいまだ不安定で、今後どのような感染拡大防止への社会的協力が要請されるのか予測できません。しかし、教育研究機関としての質の維持そして向上への努力を、私どもは怠ることはありません。他の大学でも受講できる講座は本学でも十全に用意しながら、そこに加えて二松学舎大学ならではの教育を、学生た

四月からの大学院国際日本学研究所(修士課程)および文学部歴史文化科(学士課程)の新設は、本学の教育環境の整備充実のための一環として行われるものです。旧制専門学校以来の国漢の専門性と国語科そして漢文科を持つ多様性による豊かな学びの場を、新制大学転換後も、ゆつくりとではありますが、着実にこの九段の地を中心に築いてきております。新年度からの大学院三研究科四専攻(国文学専攻・中国学専

攻・国際政治経済学専攻・国際日本学専攻)と学部二学部六学科(国文学科・中国文学科・都市文化デザイン学科・歴史文化学科・国際政治学科・国際経営学科)は、在学生の皆さんにも、これまで以上に二松学舎大学ならではの教育を直接間接に提供できる機会です。

コロナ後の大学は、ここで得た教育方法の可能性を広げながら、世界に発信し得る学びの場となることでしよう。二松学舎大学では、それに先んじて、大学院国際日本学研究所を、秋入学を可能とする世界基準で開設します。コロナ感染が収束した後は、開かれた大学院として各国からの大学生を受け入れる予定です。さらに、旧制の専門学校以来の国語科教員養成に加えて、歴史文化学科では地歴科教員養成もその視野に置いています。二松学舎大学卒業生として、中等教育の場に、地歴のOB教員が活躍する日も近いと思えます。こうした国内外に向けての本学の取り組みは、やがて二〇二七年に迎える創立一五〇年に向けての着実な歩みとなることでしょう。教職員と学生そして父母会の皆様と一緒に、この二松学舎大学の常なる変革期を共に過ごし、変わらぬご声援をいただきたいと思います。

『コロナ禍の教育と想像力』



文学部長

瀧田 浩

この『父母会報』がみなさんに届くのは今年度の授業が終わりを迎える頃ですが、その頃でも本学の教育は新型コロナウイルスの影響からまだ十分に脱することはできていないでしょう。感染リスクを避けるための配慮はまだ必要で、授業を完全に対面でおこなうところまでは進んでいません。

始業に間に合うように早足で登校しながら学生たちが交わす挨拶や雑談、教室の前を通りすぎるだけでも感じとることができた授業の活気、昼休みの食堂でのリラックスした学生たちの嬉しい語りなど、大学の日常的な風景を見ることが今は難しくなりました。「大学の先生はいつもたくさんの若者と接して、エネルギーを吸収し続けているから若い」というようなことを以前はよく耳にしましたが、今の状況が続けば、大学教員の若々しさは少しずつ失われ、本学では、昨年度からコロナ禍に

おける学生の状況や要望をアンケート調査等によって把握しようと努めています。その全体像を把握し、評価することができるとはもう少し後になるでしょう。ここでは、そのような作業とは別に、私なりに考えていることをみなさんに伝えたいと思います。コロナ禍の教育の現場にいる者が綴る覚え書きのようなものとして読んでいただければさいわいです。

マスク着用が常態化し、最近では家族以外のほとんどの人について見慣れているのはマスクを付けた顔になっけてきています。そのような中で、ときおりマスクを外した同僚や学生の顔を見て、「あれ、顔の下半分、イメージと違うな」と思うことが増えました。見えない部分について、想像力で勝手にイメージを作ってしまったのだなと気づきます。同様なことが授業においても言えるのではないかと私は危惧してい

ます。

オンライン授業にももちろん利点はありませんが、自分の授業が自分のイメージどおりに遂行できていると想像してしまいがちな点は弱点かもしれません。教室に多くの受講者がいれば、受講する学生の表情、居眠りなど、「自分が理想的な授業ができていない」という教員の幻想を打ち砕いてくれるサインには事欠きません。これらの「サイン」をみつければ、授業の進行をゆるめたり、難しくした部分を咀嚼して繰り返し、現実的な対応にもつながります。

もちろん現在も教室で受講する学生はいて、彼らが「サイン」を出してくれることはあります（先日、数少ない対面受講者のうちのひとりが居眠りしているのをみつめて、困ったものだと思いつつ、一年ぶり以上だ！と新鮮に感じている自分がいまいました）。それにしても、オンラインで繋がっている受講者の表情が見えないのは事実です。そのような面からすれば、オンライン授業で得られないことはかなり多いだろうと私は考えています。

しかし、私がここでお伝えしようと考えているのは、単純にオンライン授業よりも対面授業の方がよいということではありません。対面授業に良い点が多くあるのは事実であっても、オンライン授業で理想的な授業ができていないと考えるのが幻想で

あるのと同様に、対面授業であれば理想的な授業ができるはずだと考えるのもやはり幻想ではないでしょうか。考えてみれば、オンライン授業を始める前の授業はほとんど全てが対面授業だったわけですが、そこで理想的な授業が頻繁におこなわれるようなことはなかったはず。対面授業に戻さずばうまくいくという楽観的すぎる想像にも私たちは慎重でありたいと思います。

想像力をどのように活かしていくかを考えることがこれからの教育において重要ではないかと私は考えています。マスクに覆われている自分の顔を勝手にイメージするようになり、現実を見ずに自分に都合のよいイメージを作るのも想像力ですが、教室にいる受講者の表情に意味を讀みとり、現実にも有効な対応をしようとするのも想像力です。私の専門は文学研究ですが、文学は想像力によって虚構と現実をつなぎ人に力を与え、そのような文学の研究は社会を賦活し、良くしていくと考えています。

今後、対面授業は増えていくと思いますが、どのような授業形態であっても、生身の学生に想像力を向け、学問によって現実をより良い方向に更新していけるよう想像力を使うこと。私が今考えていることはそのようなことです。

『渋沢栄一の「逆境」観』



国際政治経済学部長

佐藤 晋

一昨年春に始まったコロナ禍も早くも二年が経とうとしています。国際政治経済学部でも大学の方針に則り、十二月六日以降は基本的に対面授業を開始しています。それでも依然として家からのオンライン授業を選択する学生が多いようで、交通費の問題などありますが、なるべく大学での対面授業を受けるように促していただくように保護者の方にもお願い申し上げます。

新年度からは原則対面授業となります。新四年生はもちろん新三年生も就職活動やインターンシップなどで対面での活動が増えてきます。そうした状況に学生さんがスムーズに移行し対応できるように今から朝ちゃんと起きて大学に通学するような習慣を少しずつでも身につけていってもらえたらと思います。

一方、昨年末からはシンポジウムなどの催しも対面、さらには外部の参加者も認めてとり行っております。十一月二十七日には昨年の大河

ドラマの主人公であり、本学第三代舎長を務めた渋沢栄一に関するシンポジウム「『論語と算盤』の真実」を開催し、熱心な学生のみなさんの参加を見ました。また、十二月二日にはシンポジウム「論語の学校」の講演の事前録画撮りにも一〇〇名を超える国際政治経済学部の学生の参加があり、久々に教室が賑わいを見せました。

最初は、友達に会って話をするとか、先生と会って直接話を聞くとから、やがては他人と直接議論したり、自分の知的好奇心を満たすようなことに積極的になってもらいたいと思います。このように自分の中の欲求にそった行動を、コロナへの恐怖や出かけることの億劫さに打ち勝ちつつ繰り返すことで、行動のモチベーションが相対的なもの、つまり欲望と恐怖や億劫さの相対的な強さいかに決まるものだということを感じていくとも思っています。我々大学側としても学生を家か

ら引き出し、知的好奇心を感じさせるようなイベントを数多く実施していきたいと考えています。

こうした欲求の中には、知識を増やしたい、偉くなりたいなどの他に、有名になりたい、お金を得たい、世間で成功者といわれたいなども含まれます。渋沢栄一も『渋沢百訓』のなかで「道理正しき功名心」はとても必要だと述べています。これがあるために勉強もするし奮発心も起こるのだというのです。功名心はまさしく欲望であり、「人は欲望の無いところには生きられない」とも論じています。

コロナ禍だからこそ、自分の本当の欲望のありかを知ることができるともいうことができます。雨が降ってもどんなに暑くても寒くても走るとが好きな人は、本当に走ることに何かと不都合な状況にも負けず、これはやりたい、ここには行きたい、この先生の講義は直接聞きたいなどといったことが分かれば、自分が本当に好きなことは何かを知ることができ、自分のやるべきことも定まってくる様に思えます。

ここ二二年間は我々すべてにとつてまさに逆境の時期と言えます。

渋沢は逆境を「自然的逆境」と「人為的逆境」に分けています。「自然的逆境」に際してはいくら焦っても無駄なので、これは天命であるか

ら仕方がないと諦めることで心は落ち着き、おもむくに来るべき運命を待ちながら屈せず勉強するしかないと思えます。一方、「人為的逆境」とは、人が勉強するかしないかの結果によってもたらされるもので、後者のような人が自ら作り出すものだとしています。風邪や腹痛も身体さえ強壯にしていれば、そんな病魔に襲われるはずもなく、平素の注意を怠ったがために自ら病気を招くのだとも述べています。

逆に一生懸命勉強して能力を高め、健康であつて努力家で、何事やらせてもうまくこなせるようになった人のみが順境を呼び込むのだと言います。「自然的逆境」を人為的なものと誤って解釈し、人間の力でどうにでもなると考えて無駄にあがくと、いたずらに苦労するばかりで疲れ切つてしまい、後日の策を講ずることもできなくなってしまうと言っています。

我々も学生のみなさんとともに、この逆境を、本当に自分のやりたいこと、やるべきことを見出すチャンスに変え、その欲求にそつてひたすら勉強して「人為的順境」を生み出す用意を十分に整え、「自然的逆境」が過ぎ去るのを焦らず待ちたいと思えます。そう遠くない先に、必ず努力の成果が花開く順境の時期がやってくるものと信じています。

(十二月八日記)

2021 創縁祭報告

学園祭実行委員会委員長

文学部国文学科 二年

水口愛子

十月三十一日(日)、十一月一日(月)の二日間にわたり、創縁祭二〇二一を開催いたしました。今年は新型コロナウイルスの感染対策のため、オンライン開催をいたしました。

各団体が準備を重ねて用意をした、最高の発表を Zoom や YouTube ライブにて配信を行いました。

創縁祭をオンラインで開催することは本学初であり、学園祭実行委員会役員一同試行錯誤を繰り返しながら渾身の力を込めて運営に臨みました。

また、学園祭実行委員会に寄せられたご意見を参考にしながら、来年度以降も皆様に寄り添う学園祭を作り上げて参りますので、何卒よろしく願いたします。

本年度お力添えをいただいた本学父母会の皆様、松茶会、学生支援課の皆様、教職員の皆様にこの場をかりて御礼申し上げます。

私自身初めての創縁祭がオンラインとなりりましたが、来年は対面での開催を学園祭実行委員会役員一同熱望しております。来年度以降も学園祭実行委員会をどうぞよろしく願いたします。



この原稿を執筆している時点では、新型コロナウイルス陽性者が減少傾向にあり、大学キャンパスに少しずつ学生が戻りつつあります。学生相談室でも、対面相談を少しずつ再開しています。パーティション越しで、互いにマスクをしていますが、目の前で話しあうというのは、格別のものがあります。

相談活動を続ける中で、強く感じていることがあります。

それは、コロナ禍が、多くの人にとって、とても大きなストレスである、ということ。これは、あらためて言葉にする必要がない、当たり前のことのようにも思えます。ですが、外出が制限され、人とのコミュニケーションも制限され、自分自身や周囲の人間の健康と生命が脅かされ、さらなる変異株の出現に怯え……。あらためて考えると、かなり強力なストレス源が、長期間存在しているという事態です。そして、このストレス状況は、特定の人にのみ起きているわけではなく、すべての人に等しく降り

学 生 相 談 室
だ よ り 115
カウンセラー **矢部浩章**

かかっているというのも、特徴的ではないでしょうか。

この状況にあって、みんなつらいのだから、自分だけがつらいと言っていてはいけなさと考えている人も、かなりいるように感じます。逆に、コロナ前の日常に戻り、リモート生活が終わることにこそ、不安を感じている人もいることでしょうか。コロナ禍への反応には、大きな個人差があるのです。

ストレスを研究するストレス・マネジメントの分野では、同じストレスになるもの（ストレスサ）があっても、その人がどのようにストレスを捉えているか、どれだけ対処能力があるか、そして周囲のサポートをどれだけ受けられるかによって、ストレスへの反応が変わってくると言われます。カウンセラーとしては、それぞれの方の抱える、それぞれのつらい気持ちを否定することなく、じっくり話を聴きながら、コロナ禍をサポート出来るかと考えています。

●新春のお歓びを申し上げます

この原稿を執筆している2022年十二月初旬は、新型コロナウイルス感染症の感染状況が低下し社会状況も安定、所謂「withコロナ」も浸透しつつあり、感染対策を講じることによって私たちの生活も落ち着きつつあります。しかし一方では新たな変異株（オミクロン）が世界的に蔓延しつつあり、本邦政府も水際対策を厳格に行い、感染拡大第六波を阻止する努力を講じています。

新型コロナウイルス感染症が流行して早くも二年が経過しようとしています。こうして一進一退しながらも新しい技術・新しい制度・新しい様式等を駆使して、ストレスを感じながらも、私たちは営みを続けています。

ア
リタ
リ
キセ
だ **65**

面接の実態調査では、全国の企業の九十二・二%が導入しており、六十三・八%の企業がすべての面接をオンラインにしたと回答しています。導入・実施をしていない企業もありませんが、オンライン面接でコストダウンが図れること等、様々なメリットがあることがわかってきましたので、現在、導入・実施をしていない企業も、これからは採用選考に取り入れていくことが予想されます。

一方で、本学四年次生の中には「オンライン面接を導入していない企業は、企業の慣例や文化に縛られて柔軟性が欠如している可能性がある企業では？」と注意しています」と、すっかり「新しい技術・制度」に対応している学生もおります。

「強いものが生き残るのでなく、賢いものが生き残るわけでもない。変化できるものが生き残るのだ」は、C・ダーウインの言葉ですが、本学

就職活動においても変化の波に晒されながら、学生の皆様は懸命に対応しようとしています。特に昨年から採用選考で導入されたのがインターネット上でオンライン・ツールを用いた面接です。経団連が2022年九月十五日に発表したオンライン

今年度の卒業パーティーについて

父母会では、例年、卒業生の皆さんのご卒業を祝し、また、在学中お世話になった教職員の皆様への感謝の気持ちを含めて、卒業パーティーを開催しております。しかしながら、昨年・一昨年は新型コロナウイルスの感染拡大を受け中止とさせて頂きました。今年度につきましても、役員会で、実施に向けて様々な検討を行って来ましたが、大人数での飲食を伴うパーティーの開催はまだ行える状況にないと判断しました。また、例年会場としていたホテルグランドパレスが閉業し、代替会場の確保も非常に困難な状況です。以上のことから、父母会主催による卒業パーティーは、誠に不本意ではありますが、今年度も開催を見合わせる事となりました。卒業生、卒業生のご父母の皆様には、大変申し訳ございませんが、ご理解いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

代替措置として父母会より記念品を贈呈する予定です。

大学の講義を受講してみませんか

二松学舎大学には、科目等履修生制度があり、大学の授業を広く一般の皆様公開しています。科目等履修生制度とは、大学で開講している授業科目(一、二科目)を学生と一緒に受講し単位も取得できる制度です。

本学学生のご父母の皆様は、生涯教育の一環として一人でも多く大学の授業を受けて頂きたいとの趣旨から、登録料の免除、科目等履修料の減額措置を講じております。この機会に、是非お子さんと一緒に大学の授業を受けられることをお勧め致します。

内容は、次のとおりです。

■公開科目

学部・大学院で開講している授業科目のうち、原則として演習科目を除く授業科目を公開いたします。

■募集要項

二〇二二年度の募集についてのお問い合わせは、二月になりましてからお願いします。

■科目等履修料

一科目 通年科目 三万円

半期科目 一万五千元

■問合せ先

二松学舎大学教務課 〇三(三三六一)七四〇六

卒業アルバム個人写真の提出のお願い

卒業アルバムは父母会より全卒業生に贈呈します。卒業アルバム用の個人写真を昨年11月から12月に大学で撮影しておりましたが、来校できず撮影が出来なかった方は、2月上旬の卒論(卒研)面接試験の時期にも撮影を予定しておりますので、来校して撮影してください。

来校での撮影が難しい場合、データもしくは郵送での提出も受け付けます。下記の要領に従って、ご提出ください。

再度、ご家庭でも学生本人にご確認ください。

□個人写真をデータ提出する場合の注意点

■スマホやデジカメなど撮影に使用する機種で「最大データ(撮影)サイズ」で撮影/保存してください(データ形式は必ずjpgにて)

※iPhoneで撮影する場合は、設定アプリで「カメラ」→「フォーマット」→「互換性優先」を選択してください。

■スナップ写真や集合写真などからの抜粋加工は承ることができませんのでご注意ください

■背景は無地の明るい部屋で。「証明写真」のような仕上がりをイメージに、必ず頭上に隙間をあげ、上半身は両肩、胸部辺りまで入れてください

■お送り頂く画像データサイズはメール添付の共用範囲内で大きめ

(目安データサイズ 1~3メガバイト程度)

※ただしこれより大きすぎるとメール送受信できませんのでご注意ください

■写真データは全体のバランスの中で補正していきますので、提出時は無加工のデータにてお願いします

■メールの件名は、「卒アル個人写真」を頭に付けて、学生番号・氏名を必ず記載して下さい。例:「卒アル個人写真218A0000二松花子」

データ提出先: sotsuaru@nishogakusha-u.ac.jp

□証明写真を郵送で提出する場合

■写真サイズ タテ5センチ×ヨコ4センチ

(右記の例を参考にしてください)

※写真の裏面に必ず学生番号・氏名を記入して下さい。

郵送先: 102-0074 東京都千代田区九段南2-4-14

二松学舎大学 四号館1階事務室 卒業アルバム係

提出締切日: 2022年2月28日(月) 必着(データ・郵送共通)

ご提出いただけない場合は、学生氏名のみ掲載となりますことをご了承ください。



顔の上に空き+左右は両肩が入りきればベスト。さらに下は胸まで写ったもの

編集後記

新年明けましておめでとうございます。昨年(二〇一九年)から続く、新型コロナウイルスの影響で、オンライン中心で授業を開始し、大学のキャンパスに、学生の姿を見かけない寂しいスタートとなりました。六月末には、卒業パーティーの会場となっていた、ホテルグランドパレスも営業終了となり、今まで普通にあると思っていたものが無くなりました。七月末から九月上旬は、感染者が増加する中、東京オリンピック・パラリンピックが無観客で開催されました。

秋以降は、ワクチン接種も進み、感染者数も減少、本学でも、十月以降は感染者の報告もなく、十二月六日からは、対面授業を希望する学生は、大学に登校して授業を受けることができるようになり日常を取り戻しつつあります。

二〇二二年は、創立一四五周年という節目の年となります。三月には、国際政治経済学部国際経営学科の第一期生が卒業します。二松学舎で学んだことを糧に世界で活躍してくれることを期待します。

また、四月には文学部に新たに歴史文化学科が誕生し、学びの幅が広がります。二松学舎も新たな一歩を踏み出します。

本年もどうぞよろしくお願い致します。